

令和7年3月1日

静岡歴研

第169号

会報

静岡県歴史研究会

発行人 篠原 旭

令和6年12月8日(日)

第142回研究会

大畑・杉井両氏発表

昨日、立冬を迎えたというのに静岡市では穏やかで温かい小春日和のような天気が続く。

本日の研究発表会は静岡市歴史博物館内の講座室にて11時より、大畑緑郎氏の『十返舎一九の父親幾八と郷土静岡』杉井籟士氏の『十返舎一九をめぐる二人を訪ねる新潟の旅』と題する研究発表が行われた。大畑氏は「駿府十返舎一九研究会」の会長、杉井氏は同会の元副会長・記念誌編集長で両氏とも四半世紀にわたり十返舎一九についての研究に取り組んでいる。

本日の参加者は15名(会員9名)であった。

大畑緑郎氏発表

「十返舎一九の父親幾八と郷土静岡」

大畑氏の研究発表は配布資料とスライドを使って行われた。

1.はじめに

駿府十返舎一九研究会が2000年に発足して、毎月一九作品の輪読と情報交換をして今日を迎えています。

これまで活動してきて思うのは、篠原旭氏が提唱する郷土学がいかに郷土の発展に役立つのかということを実感したという事です。郷土の人、我々が郷土のことを学ぶ、調べる、研究する。お金もかからず楽しく学べる、郷土の役に立つ。十返舎一九でいえば、一九は、郷土を捨てて都会に行った、出奔した、と云われてしまっている。一九は剽軽ひょうきんで滑稽な人物だと云われてしまっている。火葬したら花火が空中で花開いたとか、

